

河野里美さんに新設「大阪21世紀協会賞」

## アートストリーム2011 イン 心斎橋

平成23年10月6日～10日(大丸心斎橋店北館イベントホール)

関西で活躍する優れた新進アーティストを発掘する『アートストリーム』が、昨年11回目を迎え、大丸心斎橋店の協力を得て新しいスタートを切った。

今回は、絹谷幸二氏(画家・大阪芸術大学教授)や箕豊氏(兵庫県立美術館館長)ら審査員による「アートストリーム大賞」「同奨励賞」を新設したほか、アーティストの活動をバックアップする「企業・ギャラリー賞」を拡充。さらに、企業に対してデザインを提供する「デザインオファー権」を副賞とする「大阪21世紀協会賞」と「がんこフードサービス賞」も新たに加えた。大阪21世紀協会賞を受賞したカラー影絵作家の河野里美さん(大阪在住)は、アートストリームに過去5回出展経験があり、「現在は作家活動が中心だが、これを機により多くの人に喜んでもらえる仕事ができる期待がふくらんだ。とてもありがたいこと」と受賞の喜びを語った。また、大賞にはアストロ温泉さん(高校非常勤講師)の動くオブジェ『アストロ温泉ラボラトリー』が選ばれた。

アートストリーム2011は公募131組の中から選考を経た57組が出展。クオリティーの高い展覧会・アートマーケットとして知られ、今回は5日間で延べ3,300人の来場者で賑わった。

河野里美さんと作品



会場風景

アストロ温泉さんと展示

大阪市内を航行する全種類の船舶が一堂に

## OSAKA水上音楽パレード2011

平成23年10月23日(大川・八軒家浜界隈、道頓堀川)

大阪市内の河川を航行する観光船や荷役船、警備船など全種類の船舶が大川に集結し、吹奏楽に合わせてパレードする『OSAKA水上音楽パレード』。第3回となる昨年は、小雨が降るあいにくの天候にもかかわらず約2,700人の見物人で賑わった。

オープニングセレモニーでは、桂小春團治さんによる当地ゆかりの落語『三十石夢の通り路』に合わせ、淀川三十石船唄大塚保存会会長の市川廣さんが『淀川三十石舟歌』を披露。「名物あんころもちにころもん寿司、茶碗酒にごんぼ汁、食らうなら銭が先じゃい」と、明治10年頃まであった“くらわんか船”の口上を再現した。その後、大阪国際滝井高校、四條畷学園高校の吹奏楽部の演奏に合わせて、さまざまな船舶が大川をパレードした。

昨年は大災害に見舞われたこともあり、「水都大阪の安全・安心」をテーマに、大阪市消防局による救難訓練も実演。災害時に川や船舶が果たす重要な役割をアピールした。フィナーレは東日本大震災の被災地の一日も早い復興を願って鳩風船を放天。その後、大阪市立扇町総合高校吹奏楽部や陸上自衛隊音楽隊を乗せた音楽船が大川に向かい、戎橋付近で『MINAMI JAZZ WALK2011』参加のジャズバンドと競演し、道頓堀を川べりから盛り上げた。



大阪国際滝井高校吹奏楽部(棧橋)と陸上自衛隊音楽隊の音楽船(大川・八軒家浜)



桂小春團治さん(左)と市川廣さん(右)



道頓堀川で演奏する大阪市立扇町総合高校吹奏楽部

大阪文化祭受賞者の特別公演と交流会

## アート・アSEMBリー 2011

平成23年11月18日(クラブ関西)

大阪コレギウム・ムジクム

音楽や演劇など芸術分野の人材育成を目的として、大阪・関西を拠点に活動する優れたアーティストに発表の機会をつくる『アート・アSEMBリー』。今回は、2011年度の大阪文化祭賞グランプリを受賞した当間修一氏率いる大阪コレギウム・ムジクムと、大阪文化祭賞を受賞した能楽師 大蔵流狂言方 善竹隆司氏、善竹隆平氏による特別公演が行われた。

大阪コレギウム・ムジクムは室内オーケストラと合唱団からなり、1975年に創設。いずみホールでの定期公演など大阪を中心に各地で活発な演奏活動を続け、5回にわたるドイツ・

ヨーロッパ公演でも大絶賛を得ている。CDのリリースも多く、レコード芸術誌で数度アカデミー賞にノミネートされている。今回は当間氏の指揮による混声合唱で、『埴生の宿』をはじめ、武満徹作曲『翼』、柴田南雄作曲『追分節考(おいわけぶしこう)』(シアターピース作品)などが演奏された。

善竹氏は二世善竹忠一郎氏の長男(隆司)と次男(隆平)。2003年より兄弟で『善竹兄弟狂言会』を主宰し、兄弟で兵庫県芸術奨励賞(2003年)や大阪文化祭奨励賞(2006年)などを受賞している。また、兄・隆司氏は手塚治虫作品や大阪ゆかりの新作狂言の制作にも意欲的に取り組んでいる。今回は主人の言い付けを勘違いした太郎冠者が客人に粗相を繰り返す滑稽な演目『口真似(くちまね)』を上演。さらに特別企画として、狂言と混声合唱のコラボレーション『猿楽談義』も披露され、参加者は新たな音楽世界の魅力に引き込まれた。

演奏後の交流会には、アート・アSEMBリーの発起人である平松邦夫大阪市長(当時)も来場し、「こうした活動が、小さな子どもや芸術に触れる機会の少ない人など、より多くの人を目覚めさせ、国境のない芸術の世界を実現されることを願う」と挨拶した。

アート・アSEMBリーは、街なかに大人の知的好奇心と学習欲求を満たす場をつくり、街の活性化に結び付ける市民運動『21世紀の懐徳堂プロジェクト(大阪市、大阪大学、ナカノシマ大学、大阪21世紀協会)』の活動のひとつで、アーティスト支援の輪を広げている。



善竹隆平氏(左)と善竹隆司氏(右)



大阪コレギウム・ムジクムと  
善竹隆司氏とのコラボレーション



### 「公益財団法人 関西・大阪21世紀協会」発足へ

文化による地域活性化を目的に、民間非営利法人として公益目的事業を展開する大阪21世紀協会は、この度の法人制度改革にともない、内閣府に対し2012年4月より公益財団法人へ移行すべく申請手続きを行っております。

公益認定を契機に、当協会は、大阪を中心に関西一円を対象とした広域的な事業を行うことを改めて明確にするため、「公益財団法人 関西・大阪21世紀協会」と名称を変更することにしております。

また、1982年4月に国際的で文化的な「世界都市・大阪」の創生をめざす「大阪21世紀計画」の推進母体として設立され文化立都をかかげて活動を展開してきた当協会は、今年で設立30周年を迎えます。この度、新たに公益財団法人の認定を受けて、より一層文化の振興を通じて都市の国際的な知名度の向上や人材の育成を図り、関西・大阪の経済、社会の活性化に寄与したいと考えております。

## 交流サロン21cafe

『21cafe』は、関西を中心に文化的活動に携る方々をお招きし、毎回さまざまなテーマでお話を伺うとともに、文化に関心をお持ちの方々の交流の場として開催しています。

### 関西の国際化をいかに進めるか！

ゲスト 楠本祐一氏(外務省特命全権大使<関西担当>政府代表)  
平成23年10月24日(大阪キャッスルホテル)

楠本氏は冒頭、ハバロフスク総領事(2001年)や在ポーランド特命全権大使(2009年)などの外交官経験をふまえ、関西の国際化を進めるには、世界の趨勢と日本の現状を認識した上で課題設定すべきであると指摘。環境、エネルギー、食糧などのグローバルな問題が顕在化する国際社会は、欧米が主導権を握っていた時代とは異なり多極化または無極化していることや、日本は高齢化や低賃金、若年層の職不足などの先行き不安から消費が低迷しているにもかかわらず、がんばればもっと経済成長できるといふ“高度経済成長神話”から脱却できていないことなどを認識すべきだとした。

その上で、「関西は世界から、パナソニックやシャープなど日本を代表する企業の存在によって高い経済力を持つ地域で、環境や医療分野でも最先端の科学技術力があると見られている。加えて長い伝統のなかで育まれた文化力が工業デザインなどの日本製品にも活かされ、“クールジャパン”と高く評価されている」と紹介した。楠本氏は、こうした認識の上で関西が世界に対する発信力を高めるには、「関西とは何か」を明確にし、「人や企業を関西に呼び込む」「国際会議や学会を開催し優れた人材を集める」「英語をはじめとした語学力の向上」「神道や仏教、武士道、茶道など外国人の心に訴える関西文化の魅力をもっとPRする」ことが重要だとした。



### 知られざる大阪夏祭りの魅力

ゲスト 中田紀子氏(エッセイスト、帝塚山大学講師)  
平成23年11月29日(大阪キャッスルホテル)

生根神社『だいがく祭り(昨年7月24日～25日)』、生國魂神社『いくたま夏祭り(同7月11日～12日)』、住吉大社『住吉祭り(同7月海の日、30日～8月1日)』を取り上げ、元NHKカメラマンの橋山英二氏が撮影した映像を見ながら、それらの起源や祭りに関わる人々の思いなどが紹介された。

こうした例大祭の開催日は変えないのが慣例あるが、近年は人手不足で神輿を担ぐ若衆が少なくなり、日曜日や国民の休日に開催されるなど、祭りの形も変わってきている。『だいがく祭り』では、“だいがく(台楽または台額)”と呼ばれる高さ17mの巨大な出し物を若衆が担ぐ勇壮な祭りであるが、江戸末期には玉出に14基あったが、戦火で焼失するなどの理由で減少し、現存するのは当社の1基のみ。現在は、規模を小さくした2基のだいがくと、子ども用のだいがくが作られ使用されている。

また、昭和初期まで千人を越える陸渡御列で賑わった『いくたま夏祭り』は、戦火で御鳳輦(ごほうれん:御祭神の乗物)などは焼失したものの、往時の伝統を今に受け継いでいる。

「開催日や形が変わろうとも、皆が神に接することを喜ぶ気持は変わらない。その喜びを共有することで連帯感が生まれ、ひいては地域の人々の助け合いにつながる」という中田氏。若者たちは幼い頃から大人のように祭りに参加することに憧れて成長し、祭りに参加することで地域の一員としてのアイデンティティを得る喜びがあると強調した。



だいがく祭り

